

令和3年度収支決算報告書

俳人協会群馬県支部

(令和3年1月1日～令和3年12月31日)

収入の部		
項目	決算額	備考
繰越金	289,395	前年度からの繰越金
会費	70名×2000円	140,000
収入合計	429,395	

支出の部		
項目	決算額	備考
印刷費	21,220	会報 総会資料 各種案内等
会議費	5,050	総会 役員会等
雑費	50,000	講師謝礼
通信費	28,852	会報郵送 総会等案内状郵送
消耗品	588	宛名ラベル
支出合計	105,710	
収入合計-支出合計	323,685	次年度へ繰り越し

令和4年1月25日

上記のとおりご報告いたします。

群馬県支部長 原田 清正 ◎ 会計 林 恵美子 ◎

【会計監査報告】

会計帳簿及び関係書類を監査した結果、適正かつ正確に処理していると認められました。

令和4年1月25日

監査 吉澤 章子 ◎
監査 木下 涼 薫 ◎

令和4年度紙上総会

新型コロナウイルス
感染防止対策

新年に入り県内では新型コロナウイルスの感染が急激に拡大しています。従いまして昨年同様集合型の総会は取り止め、会報「やまどり8号」に総会資料を掲載し報告させていただきます。

事業報告(事務局長・武藤洋一)
紙上総会(2月)
会報の発行(1月、7月)
紙上講演(人間国宝・神田松鯉先生)
県支部俳句大会(会報紙上)



俳人協会
群馬県支部
☆
発行所
高崎市飯塚町737
TEL027-361-0870

令和4年度
紙上俳句大会開催

令和4年度群馬県支部俳句大会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため紙上俳句大会といたします。ご理解の上、皆様の奮ってのご参加をお願いいたします。

- 投句・ 3句(当季雑詠・未発表句)
- 締切・ 令和4年5月31日
- 投句料・ 無料
- 発表・ 会報「やまどり第9号」紙上
- 選者・ 未定
- 賞 ・ 上毛新聞社賞・支部長賞ほか

投句先・〒370-0069 高崎市飯塚町737
ハガキに俳句、氏名(ふりがな)住所、電話番号を記載の上お申し込み下さい。
※ 一般の方の投句も可。
問い合わせ・TEL027-361-0870 (原田)

- 役員会(1月・10月・12月)
- 会計報告(会計・林恵美子)
- 別掲報告書の通り
- 監査報告(監査・木下涼薫 吉澤章子)
- 別掲報告書の通り
- 予算案(会計・吉藤淳子)
- 【収入の部】
- 前年度繰越・323,685円
- 会費・80名×2,000円=160,000円
- 収入合計・483,685円
- 【支出の部】
- 通信費・50,000円
- 印刷費・50,000円
- 会議費・30,000円
- 雑費・30,000円
- 次年度繰越・323,685円

支出合計・483,685円
事業計画(事務局長・武藤洋一)
総会(紙上総会)
会報の発行(2月、7月)
県支部俳句大会(会報紙上)
秋季吟行会(日時、場所未定)
支部役員会(随時)
人事(支部長・原田清正)
令和4年度からの会計は林恵美子氏からの辞退申し出により新会計は吉藤淳子氏に委託しました。
明けておめでとうございませ
皆様のご健康をお祈り致します
令和4年元旦
俳人協会群馬県支部役員一同

宿る子に喜びと畏れ 宮崎至夏子

ひとひらの雪の軽さの子の宿り 三浦亜紀子

初めてこの句に出会って、筆者は胸の底から込み上げるものを感じ少し戸惑った。何という素晴らしい表現だろう。ひらひらと舞い落ちる雪を見た時、自身に宿る子に思いをはせる、喜びと畏れとが感じられる。これこそが詩の心だと思つた。

最近、テレビでサイエンス番組を見るのがよくある。人間の「発生」に関して最新科学による新事実には目を見張るものがある。コンピュータを使い高度な技術を駆使した映像は、何度見ても人がこの世に生まれ出る不思議さに驚愕してしまつた。番組を見た者は、年齢性別にかかわらずこの不思議に魅せられることと思う。しかし、映像化されて解説されたとしても「発生」の奇跡を客観視するにとどまる。科学で解明された事実は事実として、それを受け止める私たちの心を震わせるものは何なのか、どう表現すればよいのか。そんな疑問の答となるのが掲句と思う。

秀句に寄せて

俳句結社「椽」の主宰者である作者の傑出した感性が感じられる佳句であろう。

ごく当たり前に過ぎて行く自然の営みも、作者は平易な言葉で詩作し句にする。声に出して読むとき、その深さに誰もが心動かされずにはいられないだろう。

時満つるとき子を増やす小鳥たち 三浦亜紀子

親しき覚える「愚か」 深谷信郎

ふるさとの山は愚かや粉雪のなか 飯田龍太

故郷の山が愚か、とは変なことを言う。これが最初の印象。ふるさとの言葉からは、子供時代などを思い懐かしい気分になる。本来の愚かの語義からは離れている。愚かを字義どおりの意味に解しては、この句は分からないのではないか。そこで考える。たとえば、愚かと反対の利口に替えたらどうだろう。句にならない。小利口、などとしたりもつと句にならない。どうもこの愚かは、「お前あほだなー」というときの感情に似ている。親しさ、ほつとさせる感情、などを呼び起こす。さらに粉雪が働き、山は寒そうにぼんやりと佇んでいるように見える。なんだか途方に暮れているようにも見える。そんな姿に同情の気分も湧く。ところが、赤城山をいつも見ているある人は、この句から自嘲をくみ取った。多様な解釈を引き出す句に驚く。

三寒の抱つて四温の乳母車 和田満水

掲句は令和3年11月号「俳句文学館」掲載のもの。前句と違って考えることなくストンと分かる。子育ての機微が三寒四温の季語からよく想像できる。機微が悪いときは抱っこしてあやす。機嫌の良いときは乳母車に乗せて外に連れ出すのだ。一読即解読者に優しい句。

春服を着るポケットの無き不安 村瀬幹枝

これも同上の「俳句文学館」より。冬服はあちこちにポケットがあるが、薄手の春服にはポケットが少ない。女性でもそうなのだから、ハンドバックを持たない男性の方がその感が強いかも。同じく読者の負担がない句。

印象派の影響受ける 鈴木乗風

若い頃、今は亡き畏友の上原群青君の触発を受け、馬酔木を購読するようになり、その内、馬酔木集に投句するようになった。勿論一句常連者であった。ある時、馬酔木の重鎮同人の米澤吉亦紅さん（豊中市出身）から私の拙い句にお褒めの言葉を戴いたことがあった。それから、終生の文通交流が始まった。吾亦紅さんから、昭和52年に大阪の松坂屋で水原秋桜子拝筆展が開催されるが、希望者が多いので無理かも知れないけれど、作品を希望するならば声を掛けてくださった。そこで、赤城山で詠んだ

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々(昭和2年作) 秋桜子

が出品されていればお願いしたいと所望した。運よく抑えることが出来たと一報が入った。しばらくして作品が届き、表装も大変素晴らしい満足する出来栄への軸装であった。

作者の言葉によると、「正午に大洞を出発して、敷島口から下りることにした。敷島駅に達する道で六里ほどである。きのうと同じく麗しい日和であった。前橋口との別れ路に近く、水櫃が立っていたので、その樹蔭に休憩した。附近の木に啄木鳥が来ていて、幹を叩く音が静かな山気の中でよくきこえた。なんの苦勞もなく詠み上げたので、自分でも特に気にとめていなかったが、後にいろいろ褒めてくれる人があったので、次第に愛着を覚えるようになった。明治時代の俳句とちがって、明るい外光を探り入れたのがよかつたのである。印象派風の油彩画が好きで、展覧会を見ては勉強していた効果が現れたわけである」と述懐している。

榛名湖周辺

大谷孝子

上毛かるた「登る榛名のキャンプ村」で馴染深い榛名湖周辺。わが家から車で30分余りに位置し、私のホームグラウンドである。

おすすめの吟行地

温泉街を過ぎると榛名湖へのアプローチの九十九折が始まる。この坂道は、四季折々表情豊かで魅力的。途中のカーブに設けられた駐車場は、赤城山、子持山、その奥に武尊山、谷川岳も眺望できる絶景ポイントである。更に先に進み、道を左に少し逸れるとまるで異次元のワシノ巢風穴、オンマ谷風穴に行き着く。ここでは真夏でもはつとするほどの冷気を体感できる。本線に戻り坂を登り詰めるくと、下りで長い直線のメロディーロード。この心地良い道沿いに沼の原湿原が広がる。秋には見事な花野に変わり、大好きな松虫草、夕萋、吾亦紅等を愛でつつ木道を行くのは至福の時間である。

さて、本命の榛名湖は周囲4.8kmのカルデラ湖。榛名富士、烏帽子岳、掃部ヶ岳(かもんがたけ)等に抱かれ、空気も風も格別で自ずと笑顔になる。句材としての湖畔馬車も逃し難い。小高い丘に建つアトリエ風山荘に在りし日の夢を偲ぶのも良いかと。また、条件を整えば湖辺に蛍の乱舞も見られるという。榛名湖周辺は季語の宝庫である。佳句が生まれると信じて今後もこの地を詠み続けたいと思う。

ロープウェイ花野の中へ滑り落ち

孝子

水沢寺周辺

北村由美子

坂東三十三霊場の十六番札所 水沢観音とその周辺が私のおすすめの吟行地である。

水沢うどんの店の並ぶ参道から石段を登ると、天明7年建立の仁王門の渋い朱色が美しい。脇に大銀杏が聳え根方には暮鳥の詩碑がひっそりと建っている。更に石段を登った境内には樹齢700年の観音杉が天を突き、張られた注連縄が厳かな雰囲気を出している。千手観音が祀られている本堂の前には途切れることなく香煙がただよっている。時節になると裏側の土手一面の射干の花が印象深い。

御堂脇の急な石段を登ると踏み跡が小径となつている雑木林が広がり、上溝桜、蝮草、山帰来などに出合える。六畳間ほどの池ではお玉杓子を見つけ、傾きかけた四阿では蟻地獄を探す。参拝者の撞く鐘の音が時折響くほかは静寂そのものである。

水沢寺の駐車場から南へ5分ほど車を走らせると、県下一の名瀑船尾滝に至る。道すがら微笑みを湛えた乙女の座像が迎えてくれる。72メートルの高さから断崖を落ちる美しい滝にも是非足を延ばしてほしい。

水沢寺から北へ10分ほど歩くと、緩やかな丘陵に法水寺の大伽藍がある。台湾に総本山のある臨済宗の寺で、黄土色の屋根がエキゾチックだ。広い境内からの雄大な眺めが素晴らしい。眼下に広がる渋川総合公園は四季折々、花や紅葉、鳥の声も楽しめる。初夏にはほととぎすの音が聞けるのも嬉しい。ほかにも身近に自然豊かな吟行地が沢山あることを大変幸せに思っている。

御布呂が池

小林悦子

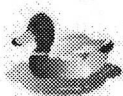
高崎市の渋川運動公園の一角に、花菖蒲の名所「御布呂が池」があります。2000平方メートル程の小さな池ですが、毎年5月から6月にかけて、池を縁取るように、白、黄、紫など10種1500株の花菖蒲が咲き乱れます。池心に架かる朱色の橋と共に水面に華やかな影を落とし雅な庭園風景を作り出しています。

この季節、池に沿った小径を辿ると紫陽花も見頃を迎え、まさに花の競演。池の石の上で甲羅干しをする亀に癒されたり、突然飛び立つ鴨の音に驚かされたりゆっくり歩いても30分程のアップダウンの小径ですが運がよければ、池に餌を求めてやって来る翡翠に出逢えることも。私も一度だけ目にした事がありますが、その俊敏な動きと美しいひすい色は「空飛ぶ宝石」そのもの。そんな翡翠の姿を捉えようと三脚を立てるアマチュアカメラマンの姿も見られます。

「御布呂が池」一帯は草木の種類が多く、四季折々、その表情を変え、訪れる人の目を魅せてくれます。秋の艶やかな紅葉はもちろんですが、冬枯れの殺伐とした園も趣があります。池の一部が水に覆われた寒さ厳しい季節に訪れたことがあります。抜けるような冬空の下、細波ひとつ無い池に鴨が寄り添い、その愛らしい姿を水面に映していた光景は忘れられません。

池風きて鴨にもありぬ初鏡

悦子



第61回全国俳句大会

俳人協会以外の一一般の方も投句・大会出席できます。

募集：2句1組（未発表作品・旧かな表記・所定用紙またはコピーしたものを使用）1月15日より俳人協会のホームページからダウンロード可能です。

投句料：1組1000円（小為替又は現金書留）

締切：令和4年4月15日（金）当日消印有効

送付先：〒169-8521東京都新宿区百人町3-28-10

俳人協会「全国俳句大会」係
電話03(33367)6621

選者：伊藤伊那男・今井聖・今瀬剛一・大石悦子・大串章・岡田日郎・小川軽舟・小澤實・權未知子・角谷昌子・古吉宗也・柏原眠雨・片山由美子・栗田やすし・古賀雪江・小島健・佐賀賀直美・鈴木貞雄・鈴木しげを・染谷秀雄・徳田千鶴子・中原道夫・仲村青彦・西嶋あさ子・西村和子・西山睦・野中亮介・能村研三・暮目良雨・福永法弘・藤本美和子・星野恒彦・松尾隆信・松岡隆子・三村純也・村上喜代子・森田純一郎（50首順）
大会：令和4年9月13日（火）

正午開場、午後1時開会（入場無料）有楽町朝日ホール・東京都千代田区有楽町2-5-1

電話：03(3284)0131

有楽町マリオン11階（JR有楽町駅中央口または銀座口・地下鉄銀座駅C-4出口・地下鉄有楽町駅D-7a、D-7b出口）車椅子での入場も可能。前もって俳人協会にお電話下さい。

賞：大会賞・秀逸賞・各選者の特選賞。

☆大会終了後応募者全員に入選作品集をお送りします。

☆応募作品の訂正・取消しには応じられません。

☆類句及び二重投句については、入選を取消すことがあります。

☆入賞作品は、俳人協会のホームページに掲載します。

☆なお大会当日、参会者より1句を募集し、特選・入選者に賞を呈します。（投句締切、午後1時。未発表作品。投句料無料）。

主催 公益社団法人俳人協会
後援 朝日新聞社

トピックス

日本漢字能力検定協会が募集する2021年の「今年の漢字」に選ばれたのは「金」。アスリートたちが血の滲むような努力の結果得た「金メダル」。大リー

グ大谷翔平の打ち立てた「金字塔」。しかし、「きん」「かね」には良いイメージばかりではない。「還付金詐欺」。

「金目」発言がブーメランとなり失脚した国会議員。百億円の大金を払って宇宙旅行を楽しむ実業家もいれば、腹を空かして子供食堂に通う子等がいる。「金」の格差は広がるばかり。戦争もすべて、「金」の分配をめぐる起る。

「金盞花」「金糸梅」「金銀花」「金木犀」。自然の中にもさまざまな「金」が潜む。子供たちにはぜひ、心の糧となるような「金」を探し当ててもらいたい。

と同時に、緑豊かな地球の再生に取り組んでほしい。

葛の実の金の生毛も初景色 星眠 (よ)

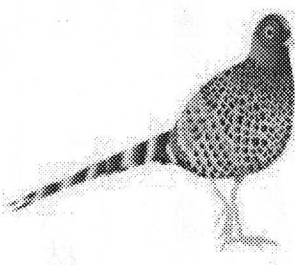
こらむ・しだりお

時代とともに言葉は変化する。よく言われるが、世代の違う人たちと懇談するとき、それを実感する。大学生たちに通じなかった言葉を列挙してみる。「活弁」「三角乗り」「鉄管ビール」「どんぶり勘定」「半鐘泥棒」―いずれも広辞苑に載っているが、その答えがまたユニークだ。▼「カツ弁」「トンカツ弁当」「三角乗り」おにぎりを巻くために三角に切った海苔。「鉄管ビール」鉄製の缶ビール。

正しく理解してもらおうのに多くの労力と時間を費やした。誤った理解もある。「役不足」を「その役は私のような若輩者には務まらない」という意味だと思っていたり、「情けは人のためならず」を「情けをかけるとその人のためにならない」と誤解していた。本当は正反対なのだが。▼手元に『絶滅寸前季語辞典』（夏井いつき編）がある。「春窮（しゅんきゅう）」「従兄煮（いとこに）」「二日灸（ふつかきゅう）」「雁瘡（がながさ）瘡（い）ゆ」「毒消売（どくけしうり）」。どれも目から鱗である。

ただ「毒消売」はなんとなく分かる。「毒消しゃ、いらんかね」（歌・宮城まり子）という歌謡曲があったからだ。▼「私じゃ雪国菓売り／あの山越えて村越えて惚れちゃいけない他国もの／一年たたなきゃ会えやせぬ／目の毒気の毒フグの毒／毒消しゃいらんかね」。コミックソングと言えるだろう。新型コロナウイルスは「毒消し」では消えないだろうか。

(M)



県鳥・やまどり